

私の失敗



上村 順子

☆ はじめに

私の勤務している阪内幼稚園は、園児数十五名、教師二名と
いう小さな園です。(園長小学校兼務) 過疎地域で小学校が統合
されたあとの校舎を、そのまま園舎に使っています。場所は小
高い山の中腹にあり、昔お城だったそうです。深い緑の山々と、
坂内川の清流にかこまれ、門のそばの古い歴史を物語るような
大きな桜の木と、石垣のまわりの数多いつつじの木がその季節
になると色あざやかに花開きます。

この地区の園児は十五名中六名のみで、残り九名の園児はそ
の地区に幼稚園がないため初めて行くと驚くような、曲りくね
った峠を二十分も定期バスに揺られて通園してきます。四月着
任して入園式の日、広い講堂の前のほうに椅子にすわっている
十五名の幼児たちの姿と、お父さん、お母さんたちに出合った

とき、このような環境の幼児期の教育をどのように考えてい
たらよいか、私自身が不安定で複雑な気持ちになってしま
いました。

☆ 幼児を迎える環境について

まず始めに困ったことは、小学校の廃校々舎をそのまま利用
しているため、園児数に対しては建物はすべて大きすぎ、保育
室にしてもどの部屋を使用したらいいか迷ってしまいました。
十五名だから同じ部屋に入れていいものだろうか？ それとも
四歳児九名と五歳児六名との部屋にわけるべきか、同僚の先生
と何度も話しあいました。こんなとき参考になる図書はなく、
経験の少ない二名であれこれ考えた結果、職員室の隣りの小
な部屋を準備室として遊具や保育用品をいれ、その隣りを五歳
児のすみれぐみ、そして便所に近いようにその隣りへ四歳児さ

くらぐみと部屋をきめました。

次に遠い山の道をやってくる園児たちに、幼稚園は楽しいところなんだ、また明日も喜んで登園しようという気持ちをもつてほしいと願いながら、次のような工夫をしました。

旧教室の壁のまわりに、戸棚や遊具などを並べておいては真中が広くなりすぎ、始めて家庭を離れてくる幼児がなお一層不安定になると考えて、できる限り家庭を延長したものに近い形にするために、使用していない宿直室から畳運びこみ、そのまわりにロッカーを置き、ままごと道具をおいてみました。入口に低い戸棚をおいたり、机の配置も考え、部屋の中へ凸凹をつくってみました。テレビも低い台におろし、黒板と共に幼児の手がとどき自由に利用できるように移動しました。

それでも登園してきた一人一人の幼児の顔をみていると、どうも満足しているようすが見受けられず、幼児が帰ったあと、五歳児の担任の方と、戸棚の位置をかえ、二名の教師といつも目だけでも連絡がとれ、教師はなるべく動きまわらなくても、幼児がどこでどんな遊びをしているも、教師の顔が見える位置に私たちがいてあげられるように努力いたしました。

次に食堂をつくりました。さいわいにも多くの部屋があるので、給食を二組が別々にそれぞれの活動が終わると始まるのでなく、六名と九名では園に安定してくると幼児たちも、

そして教師自身もさびしくなってきたので一緒に食べることにしました。五歳児に手伝ってもらって机に花模様のテーブル掛け、色画用紙で手製のシャンデリヤを飾り、回りの黒ずんだ腰板に色紙や白い画用紙でレース切りをしたのを貼ったときには、今まであまり感情を出さないM子ちゃんが、私のスモックの裾をひっぱり小さい声で、

「ここでパン食べるのか」

と聞いてくれました。教師自身が、楽しい気持ちでいるものですから「そうよそうよ、きつとおいしいわネ」と言つてその場はすんでしまいました。が、今思うと、その時M子ちゃんの感情をもつと別のかたちで受けとめて上げ、連絡ノートへも書いてあげたら、夏休み前まで友だちの遊びを自分のロッカーの前でみるが多かったのが、早い時期に解決できたのではなかったかと悔やまれてなりません。

このようにして、どちらかが早く活動が終わったら用意をはじめ、二組が揃うのを待ってから昼食をはじめようになり、にぎやかで楽しい食事がいただけるようになりました。

いろいろな忙しい四月は、砂遊び場や出入口の場所、靴箱などで困っていたであろう幼児の姿に、気付かぬまま終わってしまいました。

☆ 一日の流れのなかでの失敗のなげかず

朝、徒歩で幼稚園に来る幼児は、私が今まで経験してきた朝の出合いと同じように受け入れてあげること、私自身何も不自然さを感じませんでした。建物が大きく少人数のため、昔はおそらく来客だけが出入りしていた玄関で幼児を待ってあげるように努めましたので、幼児たちは不安げもなくやってきました。

しかし、バス通園してくる幼児をバス停まで迎えに行った時、バスから降りることによって解放された幼児の心は、幼稚園の方へ向いているにもかかわらず「おはよう」と一人一人に口早にいい、すぐ「ちょっとここで待ってね」という言葉を出してしまったことも多くありました。園になれている五歳児、はじめてひとりバスにのってきた四歳児、この違いにも気付かずただ危険防止だけしか頭にありませんでした。今度の四月には、

「バスが行くまで動かないでね」

と言葉をかけながら五歳児の手を四歳児の手にそえてあげようかと考えています。

こうして幼稚園にいった幼児たちは、友だち同志が一緒に歩いて通園してくる幼児とちがいが、私が、当然喜んで遊ぶだろう

と予想し用意しておいた、粘土、ブロックキャップ、絵本、縫いぐるみの動物、ままごと道具に目も向けずに、かばんを決めた場所におくと動きません。バス停から幼稚園までの石垣の下の坂道で、ここに顔で

「私の弁当、ソーセイジ入ってるん、とうちゃんもいっしょ」と話してくれたKちゃんも、かばんを肩からおろすのが一杯のようすで床に足を出してすわっています。四歳という年齢で二十分もバスにゆられて来るため、なんだか疲れているように見受けられました。

このような幼児にどのような方法で休息をとったり、遊びを待ってあげたらよいのかわからず困ってしまいました。

五歳児は、ブロックキャップで何か作って動きまわり楽しそうなので、同じ地区からきているA男ちゃんに
「K夫ちゃんがあんなことしてやが、A男ちゃんも、さしてもらいな」

といい手をとって五歳児のそばへ連れていきました。教師と二人では見ているのですが、私が戻ってくると、A男ちゃんもすぐかえってきます。

しかたなく粘土の入っているポリバケツのそばへ私はすわり、お団子づくりをはじめました。したら、K子ちゃんもA男ちゃんもやってきてはじめます。ままごとになってしまいました。

ロッカーの前からこちらを向いているM子ちゃんをのぞいて全員
といつても七名の（一名欠席）お団子やさんです。

バス停へ出迎える教師と、園に残っている教師と、それぞれ
異なった朝の出合い、遊びへの誘導など、どのようにすれば解
決するのと考えている私の前へ、小さいのや大きいお団子がな
らびます。

教師自身は困ってはじめて粘土遊びでしたが、それが四歳児
の朝の出合いによかったと気付いたのは、幾月もたつてからの
ことでした。

私の気持ち安定してきてから気付いたことですが、室内遊
びが主になっていて、それを小学校の建物のなかに十五名とい
う小人数の幼児たちの生活のせいにしていたのです。

運動場の片すみにある砂遊び場へも、教師が行けば幼児たち
がついてくる。それは、砂遊び場の位置がわるいと気付いて保
育室の窓の下へ砂遊び場を作る計画を父母たちに話したところ、
さっそく協力していただき、これまでみられなかった生き生き
した表情、熱中している姿を砂遊び場にみられるようになりは
したものの、いつもいつもあとから気付く自分の至らなさに情
無く思っている時、一つの出来事がおこりました。

砂遊び場へ水もちこんでキャッキョ遊んでる幼児の間に、
してはいけないにおいが流れてきました。ひとりひとりのおし

りのあたりを目で追ったり、そつとなぜたりしていましたらM
子ちゃんのパンティの中にやわらかくて温いものが入っていま
した。

次の日戻ってきた、洗って下さった幼稚園のパンティの中に
紙切れが入っておりました。

「先生、お世話をかけて申しわけございません。お恥ずかし
いことですが、田舎のことで大きい便所は危いとおもいまして
……略」

M子ちゃんは、幼稚園の便所もこわかったのです。一日の流
れもスムーズになり、活動に誘導することばかりに気をうばわ
れていた私は、ついつい活動に気をとられてしまい、基本的な
順番を待って手を洗ったり、便所の使用など入園当初とおり一
べんの指導ですませていたことを反省しました。

うわ靴を左右きちんとはけているかしら、教師もいっしょに
手を洗ったり便所へ行ったりする時間を保育の中にゆつくりと
とってあげるべきだったと、鉛筆でかかれた母親の手紙を見て
泣けてきそうになりました。

☆ うれしかつた運動会

一日に四往復というバスを利用している幼児たちですので、
入園式の日からお弁当を持つての登園、保育参観やその他の行

事ともなれば優先するのはバスの時刻、幼児の状態に応じて保育時間を考えるということは考えられない幼稚園に、私自身が安定したのは、夏休みがすぎ運動会を迎える季節になってからでした。

運動会といっても、幼稚園での運動会ではなく、二学区から通園しているため、二つの小学校への特別参加です。そこで十六名の幼児（六月に一名転入園）が大勢の中で発表できる喜びと不安が重なり、参加種目を選ぶのに一苦勞いたしました。たった十六名では円もうまくできません。そのうち半数以上が四歳ですから、無理もないとわかっていても、困ってしまいました。せめて身体につける帽子や持つ旗だけでもと、色とりどりに飾り、一生懸命練習を重ねて小学校へ参加いたしました。

大きい運動場に引かれた白い円が貧弱に見え、とても幼稚園で練習した同じ大きさの円には見えませんでした。このような教師の不安がすぐ幼児に伝染して、平素の姿を見ることができず、その結果は運動会のはなやいだ空気を中断されたようなひとときで、観客の拍手もまばらでとても淋しく悲しい思いをいたしました。

それから、しばらくして峠を越えた小さな複式学級の小学校に招待されたとき、地域的にも人数も同じような学校だったので、私たち十六名の幼児と二名の教師が門に入ると、同時にマ

イクで紹介があり、全校の暖かい拍手で観迎してくださいました。

小さい運動場いっぱい広がった幼稚園児に皆が笑顔で応援して下さったとき、私は嬉しくて涙がでそうになり、同僚の先生と手を取り合って喜びました。お互い今まで苦しんできたことが、この日一日で救われたように思われたからです。

四月に十五名だった幼稚園も今では二名増えて、少人数ながら好きなお友だちを選ぶことができるようになり、集団らしきものができてきました。

☆ おわりに

今ここに失敗続きの日々が過ぎようとしています。山間の十七名の小さな幼稚園には、きれいな空気、四季おりおり美しさをみせてくれる自然があります。その中では都会ではできない遊びが次々と幼児の間に入ってまいります。

これらの遊びは学校で習った保育内容にはないものが多いのです。私はこのことを大切にしたいとおもいます。失敗だらけの一年間でしたけれど、この経験を大切にして昨年の四月とはちがった気持ちで、新入園児を迎えたいと思っています。昨年は気付かなかった桜の花の美しさの下で、落ちた椿の花でネックレスも作って幼児と一緒に安定した気持ちで遊べそうです。